タケリン　ああ俗悪なる……

市井事　散文精神　人民文庫　酒

銀座八丁　一の酉　しょい……

大谷晃一

評伝武田麟太郎

評伝 武田麟太郎

大谷晃一

著者略歴

大正十二年大阪生まれ。関西学院大学法文学部卒業。朝日新聞大阪本社編集委員を経て、現在、帝塚山学院大学教授。著書に正、続『関西名作の風土』（日本エッセイスト・クラブ賞受賞）『おんなの近代史』『生き愛し書いた―織田作之助伝』『手仕事のおんな』『現代職人伝』『評伝 梶井基次郎』などがある。

評伝 武田麟太郎

Printed in Japan

一九八二年十月十五日 初版印刷
一九八二年十月二十日 初版発行

著者 大谷晃一（おおたにこういち）

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社
東京都渋谷区千駄ケ谷二―三二―二
電話 営業 〇三―四〇四―一二〇一
編集 〇三―四〇四―八六一一
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 株式会社亨有堂印刷所
製本 岸田製本紙工業株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

© 1982

目次

第一章　場末の童謡——その生い立ち　7
第二章　自我の情景——今宮中学時代　26
第三章　若い環境——京都・三高時代　48
第四章　風速五十米——本郷長栄館時代　75
第五章　反逆の呂律——江東・南葛時代　102
第六章　市井にはいつも何かある——浅草時代　131
第七章　汚穢の眺め——大阪帰郷時代　167
第八章　ああ、俗悪なる——日本橋茅場町時代　180
第九章　因果のある抵抗——人民文庫のころ I　222
第十章　大凶の籤——人民文庫のころ II　249

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

第十一章　生きている——麹町二番町時代Ⅰ　271
第十二章　時の間に——麹町二番町時代Ⅱ　300
第十三章　戦場の下町——インドネシア時代　323
第十四章　市井焼亡——終戦まで　355
第十五章　死の如きもの誘惑す——廃墟の中で　375
武田麟太郎年譜　403
後記　443
参考文献　447

裝幀＝榛地　和

評伝

武田麟太郎

第一章　場末の童謡——その生い立ち

その日の大阪は、晴れていた空が午後になって曇った。明治三十七年（一九〇四）五月九日である。武田麟太郎は、大阪市で生まれた。

貸し提灯の広告が、当日の大阪朝日新聞に出ている。旅順攻略の提灯行列を見越して、大阪商人は抜け目がない。が、旅順はまだまだ落ちなかった。三たび旅順口閉塞を敢行した決死の将兵の忠烈を嘉す、と明治天皇は東郷連合艦隊司令長官に勅語を賜ったというのが、九日の新聞での最大の記事である。連日の紙面は、戦争に占領されている。二十三年後、麟太郎は『敗戦主義—一九〇四年頃』でこの日露戦争を書き、旅順口閉塞の決死隊は志願したのではなくて騙されて行かされたのだと暴露する。この戦争はロシアの植民地主義を必死に食い止めようとしたのだが、同時に日本の中国侵略の決定的な弾みになった。それから、戦争は断続しながらやまない。四十二年してついに終わったとき、麟太郎は生涯を閉じた。その死にも、戦争が深い影を落としている。

父の左二郎は、数え二十八歳であった。大阪府巡査で、天王寺警察署詰だった。俸給は月十三円で、二円ばかりの手当がついたはずだが、薄給には違いない。母スミヱは二十一歳。二人のはじめての子である。五月十九日に、十五日の出生として届けを出した。

大阪市南区日本橋東一丁目で生まれた、所謂「長町」の一画である、とのちに麟太郎が自ら略歴に

書いた。この出生地を裏付ける資料はほかに何ひとつない。ただ、母スミェの父の霧渡薫がこの日本橋筋東一丁目四六六五番地の五に住んでいたことがある。現、大阪市浪速区日本橋東一丁目で、日本橋公園の東前になる。それも、麟太郎の生まれる少し前の四月八日に府下中河内郡孔舎衙村へ越している。すると、左二郎は妻の実家のそばに住んでいたのか。当時の天王寺警察署は南区天王寺六万体町にあって、口縄坂を下りると、この長町である。勤めに便利だった。が、やはり一抹の疑念は残る。わざと長町の名を自分から出したのも怪しい。彼が生まれの貧しさを誇張しているのは、他の個所でまぎれもない。彼が井原西鶴に学んだのは、この世では人はだれもが嘘をついているという考えを前提にして、だから冷たく追跡することであった。筆者もまた、この方法を取らなければならない。

そこは長町裏と呼ばれ、ひどい貧民窟として大阪では隠れもなかった。日本橋を南へ渡ると、昔は大阪も場末であった。堺への一筋の街道が通り、両側に細長い町ができた。長町という古い名の由来であった。江戸時代から木賃宿が軒を連ね、明治になって長屋がぎっしり建て込んだ。かんてき長屋、くもの巣などとそれぞれが呼ばれる。人足、行商人、くず拾い、乞食やお尋ね者が住みついている。ばくち、けんかが絶えず、外来者が一歩ここに踏み込むと、無事には帰れないと言われた。無法地帯だった。そこに、武田左二郎巡査の新婚の所帯があったことになる。薄給だったにしても。もっとも、スミェの父の霧渡薫も大阪府巡査であり、そこに住んだのは確かである。この道楽者は大酒を飲んで女をつくり、いつも窮迫していたらしい。その四月に天王寺署から府下の八尾署に移されている。ときに数え四十六歳だった。

前年の明治三十六年（一九〇三）三月に、第五回内国勧業博覧会が天王寺付近で開かれた。その跡地が、いまの新世界と天王寺公園である。見物人は長町を通らねばならない。とくに天皇行幸がある。そこで、三十四年から道路の拡張をはじめて、貧民を強制的に立ちのかせた。木賃宿の営業を禁じる。追われた人たちは博覧会場の南へ移動して行く。そこが釜ケ崎である。麟太郎が生まれたとき、その

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

大移動の余燼がまだ冷めていない。

自らの出生地とするあたりの思い出や描写を、彼は一つも残していない。当然のことだろう。もし、そこで生まれたとしても、長くはいなかったはずである。わずかに、長町あたりの裏店長屋を描いた一節が『井原西鶴』の中にある。後年、大阪へ帰った麟太郎はまだ大阪の下町に残っていた、乱雑にでこぼこした路地裏の敷瓦道を歩いたことは間違いない。想像も加えたのだろうが、長町の路地の面影を伝えている。

両側から屋根が傾いてよりかかつてゐるやうな、軒並の狭い石だたみのなかに彼は立ち止つて、高安がどの家に入るのかと興味深く眺めてゐた、団水は鼻に袖をあててゐるらしかつたが、臭気と云ふものにはすぐに馴れて了ふ彼は、もうそんなにきつく感じなくなつてゐた、すると、今度は蚊遣火の煙りの臭ひが漂つてゐるのを嗅いだ、それにはかうした町の底のしみじみとした生活的なものがあつた、彼はそれを感じ、かつての大尽が、奥の井戸端で手足を洗つてゐる真裸の手伝ひ人足と心安さうに晩景の挨拶をしてゐる姿とともに、なぜか烈しく感動した、どこかの家で暑苦しい法華太鼓と拍子木の音が小止みもなくしてゐた、高安の仮りの住居はその井戸端の前であつた、

（『井原西鶴』）

新町の薄雲太夫を身請けした高安の大尽が落ちぶれて、長町あたりに侘住いしている。大尽の遊びを手引きし、恋敵でもあった俳諧師の西鶴が弟子の団水を連れて尋ねて行くくだりである。

生まれたのが長町の一画と、麟太郎がはじめて書いたのが、ずっとのちの昭和十五年十一月である。すでに『釜ヶ崎』も『井原西鶴』も発表している。そこにも小さな疑問がある。とにかく、それが正しいかどうかは確定するすべがない。が、そのときに取り立ててそのことを明らかにしたのに、大きな意味がある。出生の貧しさの強調とともに、早くに失った生母スミエへの思慕がある。少なくとも、そこに母の実家があった。そういう町への郷愁やそこに住む人たちへの愛情が、武田文学の原動力に

なって行く。証明は、次の文章の中にある。

あんなに物思ひに沈んだ表情でこの地帯を行くのかと、人は問ふかも知れぬ。それは過去をなつかしむ感情に駆られた結果である。と云ふのは、彼はこの街で生れ、十二まで育つたのであるが、ほんの三日前、ここで彼を手塩にかけて大きくした母親が急死し、その追憶の念が、彼の足を知らぬうちに、こちらへと向けさせたわけである。……無意識にふと立ちどまり、そこで小説家がはつとして眼を転じるならば、ちやうど彼が生れて育つた家の、路次先まで来てゐるのであつた。

（『釜ケ崎』）

生母とのちの継母の死を取り混ぜて書いているが、心情はむろん生母に向けられている。釜ケ崎は、長町の生まれ変わりなのである。

その年、明治三十七年の十二月、左二郎は巡査部長に補せられた。月給十四円。

国鉄山陽本線の新倉敷駅を西へ走ると、平地が狭まって来る。金光駅から北を見やると、遙照山がさほど遠くない。そのふもとに上竹（かみたけ）という集落がある。山村で、田畑には恵まれない。いまは金光町に入るが、むかしは備中国浅口郡上竹村といった。幕末にそこから刀鍛冶の逸見（へんみ）東洋が出て、本山荻舟の『近世数奇伝』に登場する。彼は甲斐源氏の逸見氏の末裔と称した。新羅三郎義光の曾孫のうち、長兄が逸見氏の祖となり、次が武田氏を名乗った。この武田氏が図抜けて甲斐源氏の惣領の地位につき、後世に武田信玄が出る。この武田一族は鎌倉時代に諸国へ守護として赴くが、中でも安芸の武田氏はのちに足利尊氏に応じて山陽筋に勢威を張った。上竹の逸見氏もその分かれと想像される。上竹城跡が残っている。現在と違い、そのころは山陽道を扼する要地だったのである。

東洋とほぼ同じころ、上竹に数ある逸見の家の一軒で、宮之助と呼ぶ人が生まれている。天明三年（一七八三）のことである。明治の戸籍では平民だが、その前から姓を持っていて、逸見宮之助基忠と

いった。通称と実名の二つを持っているのを見ても、逸見は郷士の家である。そこから少し西の鴨方町に菩提寺の明王院があるが、過去帳に並んでいる戒名がかなりの家柄だったことを確認させる。

この宮之助が狭い山村を捨てて広大な土地へ出て行く。おそらくは次三男だったのではないか。嘉永二年（一八四九）で、幕末の激動がもうはじまっている。彼は上竹村の西山半助の娘タケをめとって長男の利介貞兵衛と次男の伊作良貞をもうけ、その年は数え六十七歳になっていた。だから、移住を実行したのは、すでに数え三十二歳だった長男の利介だったと思われる。次男の伊作は十六歳だった。宮之助の妻タケは早く亡くなっていて、伊作は後妻の某女に生まれた子である。そのときに宮之助は分家をして、武田の姓を称した。上竹に武田という家は現存しないが、当時は残っていた武田の名跡を継いだか、あるいは一族の惣領家の姓を名乗ったのだろう。何か祖先の話が家に伝わっていた形跡もあり、のちに宮之助の曾孫になる左二郎が甲斐国つまり山梨県への親近感をもらしている。その子の麟太郎が、山梨生まれの長倉とめ子と結婚した。因縁である。

倉敷の町の南に水島灘が広がっていた。古くは戦国の世から、干拓の歴史が続いた。福田新田が開かれたのは、近世の末の弘化年間から嘉永にかけてである。宮之助たちはそこにやって来た。児島郡中畝村五二番邸で、いまは倉敷市中畝四丁目六番地になる。一家は干拓田に浸かって立ち働き、米や麦や木綿を作った。あとで、米と藺草と蓮根に変える。上竹から来たので、屋号を竹屋とした。利介と後妻の佐奈との間に、長女の小浪ができた。佐奈は下道郡下倉村の向井喜代造の二女である。小浪に養子婿をもらった。下道郡尾崎村の徳田文三の二男で、仙平という。ところが、利介は父の宮之助より早く元治元年（一八六四）に先立った。四十七歳だった。利介の弟の伊作は利け者で、土地争いに村を代表して働いたと伝えられる。

中畝でも、そのとき明治維新の騒然たる響きが聞こえた。慶応二年（一八六六）、長州奇兵隊の一部が倉敷代官所を襲撃し、高瀬舟で落ちる途中、中畝に上陸した。幕軍が追って来て、銃撃戦があった。

世がかわった明治五年（一八七二）、宮之助と伊作が相次いで死に、武田家は悲運にぶつかった。宮之助は数え九十だが、伊作はまだ三十九歳の働き盛りであった。利介の養子の仙平は天保八年（一八三七）生まれだから、この年には三十六歳になっている。妻小浪は二つ下である。すでに長女美賀、次女えい、三女飛左、長男多喜次がいた。

仙平は学問があったという。侍のように品があり、凛とした顔立ちだった。鼻高仙平さん、と人は呼んだ。百姓には合わない人間であった。地道に働くのをきらい、女遊びにうつつを抜かす。たちまち、財産を食いつぶした。興行師のまねごとをして田舎芝居を打ったり、紺屋や米の賃搗きで世過ぎをするまでに落ちた。次男の左二郎がこの世に生まれ出たのは、そんな中だった。明治十年（一八七七）十一月五日である。翌年にはすでに嫁に行っていた長女美賀が、その次の年には長男多喜次が幼くして死んだ。左二郎はそのために総領の役回りを背負わされることになる。

武田家はさらに手痛い打撃を受けた。明治十六年（一八八三）八月に、小浪が死ぬ。四十五歳だった。水害のためと信じられている。が、その福田新田の大津波は翌十七年八月と記録されていて、疑問が残る。どちらにしても、左二郎が母を失い、家は流失したという事実は間違いない。この十七年四月に、左二郎は中畝小学校に入学している。現、第一福田小学校。

母代わりの姉えいが嫁入りしてしまう。里帰りするのを待ちわびた。その姉がまた婚家へ戻るとき、どこまで行っても振り返ると左二郎は見送っていた。母を亡くし、肉親の愛に飢えた。明治二十五年（一八九二）三月に小学校を出ると、彼はぐれて不良少年の仲間に入った。ばくちで倉敷の警察に挙げられる。二十歳のころ、嫁を取った。入籍していない。遠縁の娘で、おみという。器量よしだが、利発でない。本家の熊やんは頭がいいと村でも評判である。熊やんは左二郎の幼名だった。しかし、土地をすべて失っていて、ここにいては食えない。何もかもが不満であった。青雲の志を田舎で朽ちさせてしまうことは耐え難い。何としても、出世したい。

左二郎が故郷と妻を捨てて大阪へ出たのは、明治三十二年（一八九九）と思われる。数え二十三歳。父の仙平が当時は児島郡福田村大字中畝五五五番地となっていた住いを一時離れたのが、三十二年七月である。児島郡鴻村大字下村へ身を寄せている。いまの倉敷市児島下之町で、いわば近くの町へ出て行ったのである。大字南畝の共同墓地には宮之助以下の七つの墓石があったが、伊作の孫で中畝にいた中村寿子に守ってもらうことにした。

大阪で、左二郎はさしあたり人力車の車夫になった。弁護士をめざす。だが、食わねばならない。で、三十三年（一九〇〇）五月に大阪府巡査教習所に入り、六月に巡査となった。天王寺警察署詰となる。その九月に、夜学の関西法律学校へ入学した。のちの関西大学である。三年間通って、三十六年九月に卒業している。派出所勤務のかたわらだから、大変な勉強家である。しかも、三十四年十二月には和歌山地方裁判所で書記登用試験を受け、合格している。翌三十五年一月に大阪府巡査をやめた。警察官として一生を渡るにはあきたらないという気持から抜け切れなかった。裁判所書記の就職がうまく成功しなかったのか、あるいは弁護士というもっと高い望みのためかははっきりしないが、そのとき他へ転職しなかった。一方、まだ若い左二郎は恋をする。同じ交番に勤務する霧渡薫の長女スミヱがそこへ遊びに来て、知り合った。霧渡の方でこの恋愛に反対したとの話が伝わっている。霧渡家が士族で、武田家は平民だったためという。しかし、そんなに強い反対だったとは考えられない。酒色に走って困窮し、もはや出世の見込みのない年輩の巡査が、成績のよい若い巡査を娘の婿にと考える方が分かりやすい。二人は明治三十五年（一九〇二）十一月二十七日に、婚姻届を出した。左二郎は数え二十六歳、スミヱは十九歳であった。翌々三十七年二月にもう一度大阪府巡査を拝命したのは、所帯を持っていつまでも遊んでいられなかったからに違いない。

霧渡薫は大分県海部郡臼杵町の人である。臼杵の稲葉藩の藩士の家に生まれた。二十俵二人扶持で、祖父の藤七が惣役所目付役、父の喜六が剣術書記を務めた。明治十年、熊本を撤退した西郷隆盛の薩

軍が臼杵に侵入した。臼杵の旧藩士が士族隊を結成して防ぐ。十九歳の薫はこれに参加するが、六月一日の戦闘に敗れる。薩軍が臼杵を占領した。薫は離脱し、三日に投降する。政府軍が迫り、薩軍は十日に退却した。薫が郷里を捨てたのも、のちに酒色に溺れたのも、捕虜になったという心の傷跡のゆえかもしれない。

大阪へ出て巡査になった。妻の好子は卵に目鼻をつけたような美人だったという。好子はスミエを産んだあと、離別して臼杵へ帰った。薫に女ができたためである。スミエは東京へ養女にやられたことがあり、英語学校へ通ったともいう。このあたりの事情は定かではない。生母が臼杵の商家へ再嫁していると聞き、懐かしくて会いに行った。だが、その母はよそよそしかった。母は困ったのであろう。少女のスミエは、人生の悲しみを知った。彼女が小説に親しむようになるのは、そのことと無関係ではあるまい。本は買えない。暇さえあれば、貸本屋の本をむさぼり読むことになる。武田麟太郎文学の水脈は、この臼杵の一事から流れはじめる。スミエは母好子に似て、顔は卵形だった。『一の酉』のおしげのモデルをはじめ麟太郎が愛した女たちに筆者が会って、彼女たちの顔がまずは卵形なのに驚いた。十七歳で母スミエを失った麟太郎の、心の奥底をのぞいた思いに強く打たれた。スミエは横太りで背が低かった。左二郎も小柄だったから、麟太郎は生まれつき小さい。その少年時代に劣等感と伸び上がろうとする性行が、そこから芽生える。スミエの父の霧渡薫は明治三十一年に加古仲と再婚し、三十七年に長男の明が生まれたが、その年に離婚している。翌年にまた、古川ユキと一緒になった。ユキは娘スミエと同じ年である。次から次へ女を替えた。しかし、麟太郎は母スミエの死後も、よく霧渡家へ遊びに行く。明とも長く付き合った。薫は大正元年(一九一二)に死ぬ。数え五十四歳。明はのちに板前になったが、女道楽が絶えなかった。昭和三十四年に死ぬ。

家族と一しよに大阪市中を転々した。これは一家の貧窮化を意味してゐる。子供にも冷い風が吹

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook